

日本語の談話研究

— 新しい研究課題の開拓のために —

の だ ひさ し
野 田 尚 史 (日本大学)
さだ のぶ とし ゆき
定 延 利 之 (京都大学)

ワークショップの目的

- ・日本語の談話研究について、どのような分野の研究と連携させながらどのような新しい研究課題を開拓できるかを考える。

「談話」の2つの側面

【話しことばであるという側面】

- ・「談話」には、文字を使ってコミュニケーションを行う書きことばではなく、音声を使ってコミュニケーションを行う話しことばであるという1つの側面がある。

【大きな単位であるという側面】

- ・「談話」には、語のような小さな単位ではなく、文より大きく、コミュニケーションを行う単位であるというもう1つの側面がある。

談話研究の位置づけ

【書きことばの研究から話しことばの研究へ】

- ・言語の研究は書きことばを対象にして研究が始まり、次第に話しことばにも対象を広げてきた。談話研究はその流れに沿ったものである。

【小さな単位の研究から大きな単位の研究へ】

- ・言語の研究は「語」のような小さな単位を対象にして研究が始まり、次第に「文」、さらに「文章・談話」のような大きな単位にも対象を広げてきた。談話研究はその流れに沿ったものである。

【言語の構造の研究から言語の運用の研究へ】

- ・言語の研究は言語の構造を解明することを目的に研究が始まり、次第に言語の運用を解明することにも目的を広げてきた。聞き手とのコミュニケーションを扱うことが多い談話研究はその流れに沿ったものである。

考えられる研究課題

【話しことばとしての談話研究の例】

- ・[音声を使用 (パラ言語)] イントネーション, プロミネンス, ポーズ, 声質など
- ・[音声を使用 (非言語的音声)] 空気すすり, 舌打ちなど
- ・[音声を使用 (即時性)] フィラー, 言いよどみ, 言い直し, 不整合などの非流暢性
- ・[同一空間に聞き手が存在 (対人性)] 終助詞, 待遇表現, あいづち, 話者交替など
- ・[同一空間に聞き手が存在 (視覚)] 身ぶり, 視線, 表情など
- ・[同一空間に聞き手が存在 (狭さ)] 方言でのコミュニケーション

【大きな単位としての談話研究の例】

- ・[構造を持った単位 (関係表示)] 談話の部分と部分の関係の表し方
- ・[構造を持った単位 (関連付け)] 他との関係を表す指示語, とりたて表現, 副詞など
- ・[構造を持った単位 (結束性)] 視点の統一, 主題の連鎖, 主語の省略, 繰り返しなど
- ・[コミュニケーションの単位 (線条性)] 聞き手に伝える内容の順序
- ・[コミュニケーションの単位 (話題提示)] 会話の話題の選択
- ・[コミュニケーションの単位 (対人性)] 会話のスタイルや進め方

ワークショップの構成

- 9:40～ 9:50 趣旨説明 (野田尚史)
- 9:50～10:15 発表1 「話しことばとしての談話研究」 (定延利之)
- 10:15～10:40 発表2 「大きな単位としての談話研究」 (野田尚史)
- 10:40～10:45 コメント (甲田直美)
- 10:45～11:10 ご参加の皆さんとのディスカッション

ワークショップの進め方

- ・このワークショップは, 日本語の談話研究をさらに発展させるために, 新しい研究課題についてさまざまな可能性を考えようとするものです。
- ・趣旨説明や2つの発表, コメントで取り上げなかった研究課題について, ご参加の皆さんからさまざまなアイデアを出していただけると幸いです。

付記: このワークショップは, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」と「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の研究成果である。

【発表1】

話しことばとしての談話研究

さだ のぶ とし ゆき

定 延 利 之 (京都大学)

E-mail: sadanobu.toshiyuki.3x@kyoto-u.ac.jp

1. 発表の概要

- 1) 話しことば(音声言語的なことば)の研究文脈では、「談話」という用語の価値は、サイズ(文以上)よりもリアルさ(現実のコミュニケーションのことば)にある。
- 2) 「談話」にこだわらずコミュニケーションを広く見渡すこと、同時に、他分野との連携の中でも、言語形式にこだわり続けることが必要である。
- 3) 現実のコミュニケーションを見ることで、研究の前提として保持できなくなる仮説は少なくない。臆せず、研究の前提を検証していくことが必要である。

2. 談話研究の定義：文以上の「談話」か、リアルな「談話」か？

【「1文を超えて初めて観察される談話現象」はどれほどあるか？】

- ・「1文を超えて初めて観察される談話現象」の中には、実は1文の内部でも観察されるものが多々ある。(例：(1)接続詞の出現，(2)一貫性，(3)語用論的推論)
 - (1) ギリギリのところまで節水率を掛けてですね、でもそれでも9月の時点でひよっとして9月一杯雨降らなかつたら、もう間違いなくゼロになりますという位な状況まで… [https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/38922.pdf]
 - (2) ??スクリップス・オニールには妻が2人いて、チップをやるべきかやらざるべきか、丘には邪悪な白い獣のように夜明けが忍び寄り、トゲだらけの黒い枝の間を縫って、風がうなり声を上げながらそれに続き、私が18になった時、両親は私をウェールズの実家に呼び戻した。[Johnson-Laird 1983 (改変)]
 - (3) 南に100メートル、東に100メートル、北に100メートル進むと戻ってくるなら、そこはどこか？ (答：磁北極)
- ・文発話は参加者間のインタラクションの中で行われる(Goodwin 1995)ので、話し手の交替(例(4))や聞き手の交替(例(5))も1文の内部で生じ得る。
 - (4) 客：これの、2個セットになったやつ
店員：は一今ないんですね
 - (5) 実を言いますと今日で禁煙1週間だったよなあ。[Goodwin 1995: 211-212 “I gave, I gave up smoking cigarettes:: l-uh one-one week ago t'da:y. acshilly,”]これらは「文の中の談話」(Hayashi 2004)と言われることもある。この「談話」は、文を発している最中にも時間が流れて状況が変わるリアルさを表している。
- ・1文を超えたところで生じている現象に限って「談話現象」と呼ぶことはできる。

だが、それらは会話分析や音声科学の領域で以前から研究があり、日本語の研究も珍しくない（例：話し手の交替は1970年代から。エントレインメントは1960年代から。Hirschberg *et al.* 2020）。

3. 談話研究の視野：ことばか、コミュニケーションか？

【ことばに限らずコミュニケーションを広く見渡す必要性】

- ・「談話研究」とは実質的にはコミュニケーションの研究なので、コミュニケーションを広く見渡す必要がある。ことば以外のコミュニケーション構成要素は、談話理解の手がかりとなる（例：Auer 1992, Goodwin 1995, 菅原・佐藤・伊藤 2002, 菅原 2010）。
(6) [横を向いた相手の髪飾り] なんだろねーいいねー [菅原・佐藤・伊藤 2002]

【ことばの形式にこだわる必要性】

- ・コミュニケーションは、言語研究以外にもさまざまな分野からの専門的なアプローチが展開される、学際的なフィールドである。徒手空拳で乗り込んでも大きな成果は上げられない。言語研究者が頼りにできるのは、結局ことばの形式しかない。

4. 談話研究の問題意識：細部の付け足しか、前提の問い直しか？

【現実を見ることのインパクト】

- ・現実のコミュニケーションを見ることで、研究の前提として保持できなくなる仮説は少なくない。たとえば先の(4)(5)は、「文＝まとまった思想の表現形式」という仮説を前提から外さなければ説明できない。既存の前提を臆せず問い直す必要がある。

5. 事例1：自然さ・意味特性・語用論的効果の問い直し

【文の自然さ・語の意味特性と発音】

- ・文の不自然さは、発音（例(7)の場合は「間」）次第で軽減可能なことがある。
(7) a. 友達が僕のラブレターを見て笑ったよ。
b. ??友達が僕のラブレターを見て笑われたよ。
c. ?友達が僕のラブレターを見て……笑われたよ。 [定延 近刊]
- ・語の意味特性（例(8)の場合は事実性）は、発音次第で変化することがある。
(8) 社長が来るなんて知らないよ。 [定延 2021]
- ・文の不自然さが、発音次第で軽減可能なことがある（例(8)はささやき）。
(9) a. *お腹がすいているんだったら、冷蔵庫にプリンがある。 [三宅 2010]
b. " , [ささやき声で] 冷蔵庫にプリンがある。 [定延 2016]

【タイミングと語用論的効果】

- ・発話の面白さは、内容だけでなく、タイミングによっても変わり得る（羅・定延 2018）。

6. 実例2：発話観の問い直し

【非流暢性——音声言語の本来的傾向】

・音声言語と文字言語の違いは、メディア（音声 vs. 文字）の違いに終わらない傾向がある。保存と運搬の可能性が低く、出力と入力との速度差がない音声言語は、対面型コミュニケーションのことばになりがち（例：Tannen 1980, Chafe 1992）。

(10) a. [味を尋ねる相手に、その場で食べて教える] からい(よ)ー！

b. [味を尋ねる相手に、昔の経験で教える] からい??(よ)ー！

・したがって非流暢にもなりがち。母語話者も例外ではない(例：Lickley 2015)。

7. 実例3：境界観の問い直し

【目立たないことば——環境測定「リトマス試験紙」】

・目立たないことば、つまり統語的に自立しておらず、意味が希薄で、短いことば(例：(11)接頭語「お」「ご」、(12)接尾語「さん」「君」「ちゃん」、(13)格助詞「が」「を」「に」、(14)判定詞「だ」「じゃ」「で(す)」)は、語アクセントに関しても目立たず、ないがしろにされ、周囲の環境の言いなりになりがちである。

(11) a. お加減 お時間 お仕事 お受験 vs. お食事 お行儀 お財布

b. ご指導 vs. ご無事 ご関係 ご相談 ご病気 ご専門 ご経験

(12) 安藤 さん/君/ちゃん 立花 さん/君/ちゃん 伊藤 さん/君/ちゃん

(13) サル が/を/に イヌ が/を/に キジ が/を/に

(14) サル だ/じゃ/で(す) イヌ だ/じゃ/で(す) キジ だ/じゃ/で(す)

【「リトマス試験紙」を用いて「境界音調」を測る】

・ことばの音調は、区切れの前後で特別な境界音調 (boundary tone) になりがち(例：Hyman and Leben 2000: 592, Chafe 2001: 674, Gordon and Ladefoged 2001: 391-392)。「リトマス試験紙」によれば日本語の境界音調は低音調。

(15) 辞書第3巻は「乗る」から「巻く」まで 行く/がよい 当たる/を幸い

(16) (東京さ) 行く/だ 行く/でしゅ あっかんべー/だ いー/だ

(17) 人が/だなあ、いっぱい/だなあ、行って/だなあ、… cf. いっぱいだなあ

【大境界の直後の「リトマス試験紙」がなぜ高音調？——打ち消される「境界」】

・接続詞の語アクセントは、高始まり・低始まりのいずれも珍しくない。だが、判定詞を冒頭部に含む接続詞の語アクセント「じゃあ」「だが」「だから」「だけど」「だったら」「だって」「だとしても」「だというのに」「でしたら」「ですから」「ですけど」「ですが」「ですので」「では」「でも」…はすべて高始まり。節や文という大境界の直後の判定詞が高音調であるのは、それが「接続詞」だからと考えると、(4)の

「は一」が高いことも理解できる。境界とは、意味や統語構造から与えられる固定的なものではなく、作られ、後で打ち消され得るものでは？ (Sadanobu forthcoming)

8. 実例4：談話観の問い直し

【下降イントネーションにふさわしい場所は？】

- ・文中（文節末）にも文末にも出現する終助詞「よ」「さ」「ね」は、文中では（直前に跳躍的上昇がなければ）下降イントネーションでは発せられにくい（例(18)）。終助詞を「目立たないことば」と考えた場合、下降調と文末が結びつく。[定延 2019]

- (18) a. 言ってよ↓。 ??言ってよ↓, …… cf. 言って↑よ↓お, ……
b. だからさ↓。 ??だからさ↓, …… cf. だから↑さ↓あ, ……
c. 濃いね↓。 ??濃いね↓, …… cf. 濃い↑ね↓え, ……

【「名詞一語文」は文か？】

- ・「名詞一語文」と呼ばれる名詞一語発話の多くは、末尾は伸びても音調が下降しない（例(19a, b)）。但し「呼びかけ」の場合、末尾は伸びれば音調が下降する（例(19c)）。

- (19) a. [列車が松本駅に到着し、車内アナウンスが] まつもとー
b. [地図で松本駅を探しながら] まつもとー… どこだろう
c. [松本氏に向かって] まつもと↓お

【談話は「文の集まり」か？】

- ・末尾が伸びた発話の音調は、強いきもちが込められていれば一般に下降する（例(20) cf. 郡 1996, 定延 2016) ので、呼びかけの名詞一語を文として認める必要はない。

- (20) あんた↑↑ら↓あ！ いつもそうなんだか↑ら↓あ！
腹が立↑つ↓う！ イヤだ↑よ↓お！ 行け↓え！

9. 実例5：音韻の問い直し（エスノフォネティクス）

【発話音声の実態解明の必要性和意義】

- ・発話音声は言語社会間でずれている。そのずれが、既に知られた素性で説明し尽くされるとは限らない。運動体（舌等）の構造や運動空間（口腔等）は世界共通でも、運動（発話）には無限の変異がある。阿波踊り、ハワイアン、ムーンウォークのような、個別社会の中で編み出された「振付」の面が発話にはある。
- ・個別言語社会の日常は、その社会ならではの独自の「振付」を施され、独自の意味を担う発話音声に満ちている。だが、郡(2006)の「口調」研究などを除けば、それらはほとんど等閑視されている。こうした発話がいったい何事であるのか、[1]「振付」の意味と効果を母語話者の感覚に寄り添う形で記述する一方、[2]「振付」の詳細（つまり形式）を音声科学者と協働しつつ探求しなければ、発話という運動の奥深さは解明できないのではないか。エスノシンタクス (Ethnosyntax, Enfield 2002) の音声版が必要ではないか。

【[1]「振付」の意味と効果の記述】

- ・「口をとがらせた」発話とは何事か。慣用句として知られているのは、子供っぽい不満の抗議だが、実は大人の恐縮発話でも口はとがることがある（定延・林 2016, 朱・定延 2016）。

【[2]「振付」の詳細説明】

- ・ケーキ屋の店先で年若い売り子が発する甘い売り声は、日本語母語話者に高く評価される一方で、アメリカ英語母語話者や中国語母語話者には高く評価されない。背景の違い（ケーキ屋の売り声に馴染がある／ない）を仮に度外視すれば、音声の多面性が影響している、つまり日本語母語話者は（“twang”な）声質を重視、アメリカ英語母語話者はピッチレンジを重視、中国語母語話者は F0 ピークの高さを重視して評価している可能性がある（Sadanobu, Zhu, Erickson, and Obert 2016）。

今後の展望

【談話研究は文や語句の研究である】

- ・文や語句の研究を離れたところに談話研究はない。談話研究はそれらの深化である。

【談話研究は「作れる」】

- ・従来の研究と同じように談話研究はできない。逆に言えば、談話研究は「作れる」。

付記：この発表は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究（(S)20H05630, 研究代表者：定延利之）の成果を含んでいる。

引用文献

- 郡史郎（1996）「音声の特徴からみた文」『日本語学』10（15），pp. 60-70. 東京：明治書院。
- 郡史郎（2006）「日本語の「口調」にはどんな種類があるか」『音声研究』10（3），pp. 52-68.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/10/3/10_KJ00007631709/_pdf
- 定延利之（2016）『コミュニケーションへの言語的接近』東京：ひつじ書房
- 定延利之（2019）『文節の文法』東京：大修館書店
- 定延利之（2021）「染み込み速度と「た」—さまざまな現象の中で」庵功雄・田川拓海（編）『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2:「した」「している」の世界』pp. 71-93, 東京：ひつじ書房
- 定延利之（近刊）「受動文の視座」庵功雄（編）『日本語受動文の新しい捉え方（仮題）』東京：くろしお出版
- 定延利之・林良子（2016）「コミュニケーション研究からみた「剰余」の声—日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」『音声研究』20（2），pp. 79-90.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/20/2/20_79/_pdf
- 朱春躍・定延利之（2016）「調音動態から見た「剰余」の声—日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」『音声研究』20（2），pp. 91-101.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/20/2/20_91/_pdf
- 菅原和孝（2010）『ことばと身体—「言語の手前」の人類学』東京：講談社。

- 菅原和孝・佐藤知久・伊藤詞子 (2002) 「会話テキストはいかにわからないか—相互行為への投錨」『相互行為の民族誌的記述的記述—社会的文脈・認知過程・規則』(科研報告書) pp. 5-36.
- 三宅知宏(2010) 「日本語の疑似条件文と終助詞」(招待発表), 日本語文法学会第11回大会, 2010年11月7日, 於就実大学(『日本語文法学会第11回大会発表予稿集』所収)
- 羅希・定延利之 (2018) 「ユーモアを生み出すための日中の「間」—ボケとツッコミのタイミングに関する考察」『日中言語研究と日本語教育』第11号, 22-36.
- Auer, Peter. 1992. "Introduction: John Gumperz' approach to contextualization." In Peter Auer, and Aldo Di Luzio (eds.), *The Contextualization of Language*, pp. 1-37, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Chafe, Wallace L. 1982. "Integration and involvement in speaking, writing, and oral literature." In Deborah Tannen (ed.), *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*, pp. 35-53, Norwood, New Jersey: Ablex.
- Chafe, Wallace. L. 2001. "The analysis of discourse flow." In Deborah Schiffrin, Deborah Tannen, and Heidi Ehemberger Hamilton (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*. MA: Blackwell. pp. 673-687.
- Enfield, Nick J. 2002 "Ethnosyntax: Introduction." In Nick J. Enfield (ed.), *Ethnosyntax: Explorations in Grammar and Culture*, pp. 3-30, Oxford: Oxford University Press.
- Goodwin, Charles. 1995. "Sentence construction within interaction." In Uta M. Quasthoff (ed.), *Aspects of Oral Communication*, pp. 198-219, Berlin; New York: Walter de Gruyter.
- Gordon, Matthew, and Peter Ladefoged. 2001. "Phonation types: A cross-linguistic overview." *Journal of Phonetics* 29, pp. 383-406.
- Hayashi, Makoto. 2004. "Discourse within a sentence: An exploration of postpositions in Japanese as an interactional resource." *Language in Society*, 33 (3), pp. 343-376.
- Hirschberg, Julia, Štefan Beňuš, Agustín Gravano, and Rivka Levitan. 2020. "Prosody in discourse and speaker state." In Carlos Gussenhoven and Aoju Chen (eds.), *The Oxford Handbook of Language Prosody*, pp. 468-476, Oxford: Oxford University Press.
- Hyman, Larry M., and William R. Leben. 2000. "Suprasegmental processes." In Geert Booij, Christian Lehmann, and Joachim Mugdan (eds.) in collaboration with Wolfgang Kesselheim and Stavros Skopeteas. *Morphology: An International Handbook on Inflection and Word-Formation*, Vol. 1, pp. 587-594, Berlin; New York: Walter de Gruyter.
- Johnson-Laird, Philip Nicholas. 1983. *Mental Models: Toward a Cognitive Science of Language, Inference, and Consciousness*. Cambridge, MA: Harvard University Press. [P・N・ジョンソン＝レアド(著), 海保博之(監修), AIUEO(訳)『メンタルモデル—言語・推論・意識の認知科学』東京:産業図書, 1988]
- Lickley, Robin J. 2015. "Fluency and disfluency." In Redford, Melissa A. (ed.), *The Handbook of Speech Production*, pp. 445-474, Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Sadanobu, Toshiyuki. Forthcoming. "Is discourse made up of sentences?: With a focus on dependent grafted speech in Modern Standard Japanese." *Journal of Japanese Linguistics*.
- Sadanobu, Toshiyuki, Chunyue Zhu, Donna Erickson, and Kerrie Obert. 2016. "Japanese "street seller's voice."" *POMA, Speech Communication*, 5aSC46.
<https://asa.scitation.org/doi/abs/10.1121/2.0000404>
- Tannen, Deborah. 1980. "Spoken/written language and the oral/literate continuum." *Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 207-218.

【発表2】

大きな単位としての談話研究

の だ ひさ し
野 田 尚 史 （日本大学）

E-mail: noda.hisashi@nihon-u.ac.jp

この発表で取り上げる研究課題

【構造を持った単位としての談話研究例】

- 1) 談話の部分と部分の関係を表す接続表現：どのようなときにどんな接続表現を使うか、あるいは使わないか？
- 2) 談話の構造を表すさまざまな文法的手段：談話の部分と部分がどのような関係にあるかという構造を表すのにどんな文法的手段が使われるか？
- 3) 談話の他の部分やそのときの状況との関係を表すとりたて表現：談話の他の部分や状況との関係を表すのにどんなとりたて表現を使うか、あるいは使わないか？
- 4) 視点の統一と主語の省略：主語を統一して視点を統一するかどうか、また、それによって主語の省略が可能になるかどうか？

【コミュニケーションの単位としての談話研究例】

- 1) 聞き手に伝える内容の順序：聞き手に何かを伝えたいとき、どのような内容をどんな順序で伝えるか？
- 2) 会話の話題：どんな状況のときに何を話題にするか、また、その話題によって何を相手に伝えるか？
- 3) 話し手と聞き手の役割についての会話スタイル：話し手と聞き手がどんな関係のときに話し手と聞き手はどんな役割を演じ、どのような会話スタイルを取るか？
- 4) 会話の継続：会話を長く継続することと、会話によって相手の時間を奪わないようにすることのどちらを重視するか？

【機能を重視する研究】

- ・日本語の談話研究では、フィラーやあいづち、終助詞など、話しことばに特徴的な文法形式についての研究は比較的古くから行われてきた。これからさらに新しい研究を開拓していくためには、「何のためにその形式を使うのか」「なぜそのような構造を作るのか」といった機能を重視する必要がある。

【対照言語学的な研究】

- ・日本語の談話研究は近年盛んになってきており、研究が蓄積されてきている。これからさらに新しい研究を開拓していくためには、対照言語学的な研究も行う必要がある。日本語と他の言語の対照だけでなく、日本語の方言間の対照、現代語と古代語の対照も、新しい研究を開拓していくのに有益である。

構造を持った単位としての談話研究

【談話の部分と部分の関係を表す接続表現】

- ・ (1)の日本語では逆接の「けど」が使われているが、翻訳されたスペイン語では順接の「y」(そして)が使われている。日本語では「それを考えたら、そうする可能性が高かったはずだが、そうしなかった」という推論を「けど」で表している。一方、スペイン語ではそのような推論を表さず、起きたことを順に述べていると考えられる。

(1)a. [お父さんのロールケーキの専門店を継ぎに帰ってきたという岩倉くん「その店でお父さんがロールケーキを作り、(フランスでケーキ作りを学んできた)岩倉くんがケーキを作るのか」と質問したのに対して]
「それも考えたんだけど、せっかく専門店として売ってるわけだから、そういうのはクリスマスと注文だけにしようかな、と思って。……」

(吉本ばなな『デッドエンドの思い出』p.52)

b. También he estado pensándolo y, ya que el negocio se ha ganado la reputación como pastelería especializada en rollos de bizcocho, se me ha ocurrido que podría hacer pasteles sólo por encargo o durante la Navidad.

(Yoshimoto. *Recuerdos de un callejón sin salida*. p.52)

- ・ どんなどきにどんな接続表現を使うか、また使わないかは談話研究の課題になる。

【談話の構造を表すさまざまな文法的手段】

- ・ (2)では、談話の構造を表すために(3)のような文法が使われている。

(2) 13B : 飯島直子見た↑、アブナイ話。あつ、飯島直子じゃない、★飯島愛。

13C : →見たわよ。←

13B : あれ誰のことってんの↑ピーピー、ピーピーは行っててさー。トレンディ俳優ってだれ、あれ。加勢大周↑吉田栄作↑

(『女性のことば・職場編』7398-7405)

(3)a. テレビ番組「アブナイ話」が動詞「見た」に後置されている。質問の焦点は「見たか見なかった」なので、「アブナイ話」は下降イントネーション。

b. 「あつ」と「じゃない」によって「飯島直子」を「飯島愛」に訂正している。

c. 「ピーピー、ピーピーは行っててさー」は、わからなかった理由。わからなかったから質問しているのだが、「わからなかった」は省略されている。

d. 「トレンディ俳優ってだれ」で「あれ誰のことってんの↑」に「トレンディ俳優」という情報を加えて繰り返している。最後の「あれ」によって前の「あれ誰のことってんの↑」との関係を明示している。

e. 「加勢大周↑」「吉田栄作↑」は質問の焦点なので、上昇イントネーション。

- ・ 談話の構造を表すのにどんな文法的手段が使われるかは、談話研究の課題になる。

【談話の他の部分やそのときの状況との関係を表すとりたて表現】

- ・ (4) の日本語では類似を表すとりたて表現の「も」が使われているが、原文のスペイン語では「も」に相当する「también」が使われていない。日本語では、ぼくがベアと同じことを考えていたのであれば、「ベア」との類似を表すために「ぼく」に「も」を使う必要がある。一方、スペイン語では「eso mismo」(それと同じこと)があれば同じだとわかるので、「Bea」(ベア)との類似を表すために「yo」(ぼく)に「también」(も)を使う必要はないと考えられる。

(4) a. 「来ないかと思ってたわ」とベアが言った。

「ぼくもおなじこと考えてたよ」とぼくは答えた。

(サフォン『風の影(上)』 p. 293)

b. —Creí que no ibas a venir —dijo Bea.

—Eso mismo pensaba yo [ø] —repuse. (Zafón. *La sombra del viento*. p.209)

- ・ 談話の他の部分やそのときの状況との関係を表すためにどんなとりたて表現を使うか、また使わないかは、談話研究の課題になる。

【視点の統一と主語の省略】

- ・ (5) では、「言 (い) われてた」「考えてなかった」「思ってて」「したら」「言 (い) われた」「思ってなかった」「言 (い) われた」の主語をすべて「私」で統一することによって視点を統一している。その統一によって、それぞれの主語を言わなくても、主語がだれであるかを理解できるようにしている。特に「私」が出てくる談話では、「私」を主語にしなければならない。

(5) A20f: ちょっとアルバイト感覚で {うん [C80m]} 教えて、でも、本業は、まあ、「大学院に行 (い) けば {うん [C80m]} いいんじゃない↑」みたいなのは言 (い) われてたんだけど、でも、大学院に行 (い) くことを全然考えてなかったし {うーん [C80m]}、<少し間> どうしようかなあって思ってて、という話をママにしたら、何 (なん) か、ママは、もう「[A20f 名] が多分中国に行 (い) ったら、だい (=「大学院」と言いかけたか)、何 (なん) だろう、大学院に行 (い) くかなって、ちょっと思ってたんだよね」って言 (い) われた【笑いながら】。

C80m: ふーん。

A20f: 全くそんなの思ってなかったけど。

A20f: だから、それでもいいかなっていうのと、やっぱりママたちもどっちかっていうと、台湾に行 (い) ったほうが、ちょっと安心するって言 (い) われた =。 (『談話資料 日常生活のことば』SF103, 212-215)

- ・ 日本語では、視点を統一するために主語を統一しようとする傾向が強い。それによって主語が一貫するので、主語を省略しても主語が何かを理解できる。視点の統一と主語の省略が言語によってどう違うのかは、談話研究の課題になる。

コミュニケーションの単位としての談話研究

【聞き手に伝える内容の順序】

- ・ (6)のロールプレイをしてもらった日本語学習者は(7)のKのように話した。実線の下線のように最初に「時間がない」や「忙しい」という理由を言い、その後、点線の下線のように依頼内容を言った。これでは聞き手に何の用件かが伝わりにくい。

(6) あなたは、日本料理店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。勤め始めてからずっと接客の仕事をしてきたので、この仕事にもすっかり慣れ、知り合いのお客さまも増えました。今は、一週間に三日アルバイトをしています。しかし、忙しくなってきたので、一週間に二日に変更したいと思っています。そこで、店長に言って三日から二日に変えてもらうように頼んでください。

(7) K: あちょっと、ちょっと質問があります

K: えーと、あん実は今、時間があまり、ありません

K: え、えーとその理由、ほんとに忙しい

K: えーと、んー、えー、あーちょっと

K: あはい、あんー大学であーレポートがたくさんあります、あレポート、試験、本当に忙しい〈うーん〉えーその(連体詞)理由、ちょっと

K: ちょっと、うーん、んー、んー、お願いがあります

K: あんー今あーさん、にち(三日) いっしゅあー一週間にさんにち(三日)にあ、働きます

K: えーと、うんにあー、あんに一にち(二日)あー働いてもいいですか?

(「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」, フランス語話者, FFR23-RP1, それぞれの発話の間に入っている相手の応答やあいづちは省略)

- ・ 日本語母語話者は比較的早めに依頼内容を言う者が多い。中には(7)の学習者と同じように先に理由を詳しく言う者もいるが、(8)のように、理由の部分で言い終わらない形で後につないでいたり、「皆さんにご迷惑かけて申し訳ないんですけども」のように相手にとって好ましくないことを依頼する予告をしたりしている。

(8) K: えとー、今ちょっと、あの一大学で〈はい〉、あの一、そろそろ、論文を〈えーえー〉、書こうっていう時でー〈はい〉、ちょっと忙しく、なって、きまして〈えーえー〉、でーほんとに、あの一皆さんにご迷惑かけて申し訳ないんですけども〈はい〉、今あの、週、三日間、シフトに入ってると思うんですけども

K: 週二日に、変えたいなと〈んー〉、思ってます

(「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」, 日本語話者, JJJ01-RP1, 発話の間に入っている相手の応答やあいづちは省略)

【会話の話題】

- ・(9)は、朝鮮語と中国語を母語とする日本語学習者が先生の顔に吹き出物ができているのに気づいて言った発話。「先生のことを気にしている」ということを伝えるのが重要だと考えているからだろうが、質問されても答えにくく、困ることが多い。

(9) 「先生、どうなさったんですか？」

- ・日本語母語話者も先生が松葉杖をついていれば(9)のような発話をすることが多い。質問に答えやすいからだろう。どの程度のことでも声をかけるかは言語によって違う。

【話し手と聞き手の役割についての会話スタイル】

- ・(10)では、中国語を母語とする日本語学習者は質問されたことにだけ最小限の答えをしていて、日本語母語話者には会話を発展させようとしていないと感じられる。

(10) 相手：どれぐらい時間かかるんですか

学習者：電車は2分

相手：2分ですか

学習者：2分だけです

相手：じゃ、歩いて来ることができますか

学習者：はい

相手：歩いて来られるんですか

学習者：はい

相手：じゃ、近くていいですね

学習者：はい {笑い} (「KYコーパス」, 中国語話者, 上級 (CA01))

- ・中国語母語話者は、特に相手が年上で、上の立場の人の場合、相手に質問されたことにだけ答え、質問されていないことを勝手に話さないほうが相手を尊重した会話になると思っている可能性がある。言語によって好まれる会話スタイルが違う。

【会話の継続】

- ・(11)では、タイ語を母語とする日本語学習者は会話を継続することを重視している。

(11) 相手：どうもありがとうございました。特にこれ以上お話することもないようですし、このあたりで。

学習者：先生、授業は1時からですよ。

相手：ええ、はい、そうですが。ほかにも仕事はありますし。

学習者：せっかくお時間をいただいたのに申し訳ないです。もう少し話しましょう。

相手：え、いや、お気遣いいただくことでも。

学習者：いえいえ、たくさん話したほうが成功します。お話ししましょう。

- ・会話を長く継続することと、会話によって相手の時間を奪わないようにすることのどちらを重視するかは、言語によって違う可能性がある。

今後の展望

【談話の構造の研究】

- ・話しことばである談話の構造は、書きことばである文章の構造と共通することが多い。文章の構造の研究は比較的多い。
- ・今後、談話の構造の研究は文章の構造の研究を参考にしながらも、串田・定延・伝(編) (2005・2007・2008) や筒井 (2012) のように文章の構造とは違うことを中心に研究を開拓していく必要がある。

【コミュニケーションとしての談話の研究】

- ・コミュニケーションとしての談話の研究では、依頼表現、断り表現、誘いかけ表現、感謝表現、謝罪表現など、相手に対する働きかけがある表現の研究が多い。
- ・今後、コミュニケーションとしての談話の研究は、相手に対する働きかけがないものを含め、三宅・野田・生越(編) (2012) や津田(他) (2015), 宇佐美(編) (2020) のように対照言語学的な観点も考慮して開拓していく必要がある。

付記：事例の収集では、近藤めぐみさんの協力を得た。

例文出典

「KYコーパス」, 鎌田修・山内博之, version 1.2, 2004.

Zafón, Carlos Ruiz. *La sombra del viento*. Planeta. 2001.

サフォン, カルロス・ルイス『風の影(上)(下)』, 木村裕美(訳), 集英社文庫, 集英社, 2006.

『女性のことば・職場編』, 現代日本語研究会(編), ひつじ書房, 1997. [『男性のことば・職場編』(現代日本語研究会(編), ひつじ書房, 2002) の「自然談話データ CD-ROM」収録の「女性談話.TXT」を使用]

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS), 国立国語研究所, 2020.

『談話資料 日常生活のことば』, 現代日本語研究会 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子(編), ひつじ書房, 2016. [付属の談話資料データを使用]

吉本ばなな『デッドエンドの思い出』, 文藝春秋, 2003.

Yoshimoto. Banana. *Recuerdos de un callejón sin salida*. Gabriel Álvarez Martínez (訳). Tusquets. 2011.

引用文献

宇佐美まゆみ(編) (2020) 『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』 ひつじ書房.

串田秀也・定延利之・伝康晴(編) (2005・2007・2008) 『シリーズ 文と発話』(全3巻), ひつじ書房.

津田早苗(他) (2015) 『日・英語談話スタイルの対照研究—英語コミュニケーション教育への応用—』 ひつじ書房.

筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』 くろしお出版.

三宅和子・野田尚史・生越直樹(編) (2012) 『「配慮」はどのように示されるか』 ひつじ書房.